



日本共産党 白川 容子
白川容子参院議員の初質問を傍聴して

白川容子参院議員 国会で初質問

日本共産党の白川容子参院議員は11月20日の参院厚生労働委員会初質問に臨み、診療報酬の大幅引き上げと、市販薬と同等の効能がある処方薬IOTC類似薬の保険適用の継続を求め医療費抑制はどの世代にも負担軽減にならないと追及

白川よう子参院議員の初質問を傍聴して

11月20日、白川参院議員初質問の日がやってきた。「行くぞ香川からも国会へ」と挑戦して実に28年。この日を夢見てきた一人として、また同じ思いをもつ多くの方々を思い浮かべながら国会傍聴に参加した。

白川議員が所属する厚生労働委員会は超多忙。2回の委員会でも最高の秘書メンバー4人に支えられ、元気いっ



定価 月 100円
発行所
民主香川社
高松市藤塚町
3丁目13-14
☎(087)834-7311

平和と安全な暮らしを守る県政へ 梶県議の委員会質問 その1

船形の旧県立体育館は、県がすでに取り壊しを決めています。が、「再生委員会」や市民から

①旧県立体育館の存続については県民に開かれた場で協議を

かし県議は3点について質問を行いました。

11月26日、総務委員会（総務・危機管理総局・公安委員会関係）



「保存を」と言う声が高まっています。梶県議は、9月議会で解体の入札手続きを一旦中止し、県民に開かれた場で協議すべきと質してきました。しかし県は解体業者を合田工務店に決定。その後も、「再生委員会」から、解体の再考を求める署名4万9247筆と要望書が県教委にだされ、県議会には解体手続きの保留も視野に入れた「2面に」

白川議員は、医療団体や労働組合から病院経営の危機的状況や患者の不安の声をとり上げ思わず涙ぐむ場面があり、自民党の委員から「そうだ」の声が出るほど迫力ある質問だった。

上野厚生労働大臣は医療現場の実態改善は、「現役世代の負担減、高齢者には負担増」との立場に固執。白川議員は、「アメリカ言いなりの大軍拡」、「財界利益第一では希望は開けない」と厳しく指摘。堂々とした論戦だった。終了後、白川さんと四国ブロック、日本福祉大OB、秘書団の慰労会では党を大きくしようと時間を忘れて盛り上がり元気がでた。

泉 敏裕

太鼓台囃

岡田まなみ市議の生活相談で学校に子どもが行きたがらない、このままだと不登校になる、その原因が学校の匂いにあると聞き、その時は正直驚きました。

その子どもさんは、友達や自分の匂い、トイレの芳香剤の匂いで気分が悪くなり、学校にいけないのが辛いとのこと。市議と保護者と学校に行き、学校長などと話し、学校でワックスや芳香剤の使用をやめることと、保護者にも柔軟剤や香り付き洗剤の使用を控えてほしいという主旨の手紙を出してくださるようになりました。考えてみれば私自身も、化粧品売り場は匂いがきつくて早足で通り過ぎ、電車で隣り合わせになった人から香水の匂いがすると離れていました。しかし、テレビのCMを観て、ふかふかのタオルいいなと思って柔軟剤を購入して使っていました。

今年になり、赤旗日刊紙にも「香害」が取り上げられ、小中学生の1割が体調不良を経験しているとの記事が掲載されました。キンモクセイや水仙の自然の香りは心を癒やしますが、人工的な香りは百害あって一利なし。もちろん柔軟剤は廃棄しました。(一)

市民連合が14力所で宣伝

市民連合のかかわりは11月19日、香川県内の14力所で宣伝し、安保法制の廃止と立憲主義の回復を求めました。

高松市の瓦町駅前では、日本共産党の藤沢やよい、立憲民主党の山西朋子の両市議、県平和労組会議の福田裕之議長がリーダーを務めました。

国は昨年3月、県の同意を得て高松港を特定利用港に指定。今度は高松空港の特定利用空港の指定が狙われています。

藤沢氏は特定利用空港・港湾の指定の問題では（有事に）攻撃される対象になるとして、「県民の安全を守るため、高松空港、高松港の指定受け入れを拒否・撤回すべきだ」と強調しました。

「高市氏の『台湾有事は存立危機事態』の発言で中国



と国際問題が徐々に大きくなっている」と述べ、日本は戦争でなく平和の道に進むべきとして、「アメリカ言いなりな軍事費増大をやめ、大切な税金を暮らしや物価高対策へ優先して使うべきだ」と訴えました。

福田氏は「日本には中国などと軍事力で張り合うより、経済交流などの平和外交が必要だ。防衛費の増額よりも物価高に対する経済政策、社会保障、教育などへ（予算を）まわすべきだ」と述べました。

特定利用空港・港湾の問題点などを記したビラを配り、多くの人が受け取りました。

これからの社会保障を考える 高齢化、人口減少 そして「大軍拡」の流れの中で 29

社会保障のあり方について考える会 準備会 藤井 明

「新自由主義」の時代と「社会保障」②

常々日本の農業政策を厳しく批判している東京大学の鈴木宣弘先生（農業経済学）は新自由主義的風潮を、「今だけ、金だけ、自分だけ」と言う言葉で表現してあられますが、新自由主義の下での人間の心情をよく表していると思います。そして、人々から余裕を奪い、絶え間ない競争へと駆り立てた新自由主義の具体的な「やりくち」は、次のようなものでした。

民間の活力であり、公的部門は縮小して民間の活動に移管するという事で、可能な限り分割と民営化を進めようとした。また、効率至上主義の立場に立つて、人間にとって必要なものまでも切り捨てて行きました。これは、一切の「余裕」を不要なものとして奪い去る言うことに他ならず、この流れの中で、保健所が94年の848力所から2020年には469力所に激減し、「コナ対応で大きな支障をきたしたのは記憶に新しいところ」です。

こうして、新自由主義の下では、何かがうまくいかなければそれは押しなべて「自己責任」、という事で物事が進み、社会保障は、考え方としても具体的な施策としても後景に追いやられることになりました。

強調され、その下で、公的保険の縮小による民間保険の市場拡大、サービス提供主体のほとんどを民間に委ねての介護保険の運営、自治体業務の民間への委託などが大いに進みました。最近、自民と連立した維新は「民間保険の活用方法を含めた医療保険システムのあり方の検討」を掲げていますが、これもまた、病気を自己責任とし、社会保障としての公的保険を縮小する方向の最たるものだと言えるでしょう。

